

白居易の「遺愛寺鐘欵枕聽」について

加 固 理 一 郎

序

白居易の「香鑪峯下新卜山居草堂初成偶題東壁（香鑪峯下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶たま東壁に題す）」詩（『白氏文集』卷十六、以下、「香鑪峯下」詩と略す）五首のうちの第四首は、日本においては白居易の代表的な詩の一つとされる。⁽¹⁾それは、この七言律詩の頷聯の対句「遺愛寺の鐘は枕を欵そはたてて聴き、香鑪峯の雪は簾を撥かかげて看る」が、菅原道真の詩や清少納言の『枕草子』の逸話によって広く知られているからである。しかし、「香鑪峯下」詩第四首の解釈には、いまだ定説が得られていない。⁽²⁾特に、先に示した対句の中の「枕を欵くつ」の語の解釈については、綿密な論考が複数発表され、なおかつそれらの結論が異なっている、という状況にある。本論文は、この「香鑪峯下」詩第四首の「欵枕」の解釈について、先行研究とは異なった視点から考察するものである。

一、「香鑪峯下」詩五首の構成

「香鑪峯下」詩五首は、白居易四十六歳・元和十二年（八一七）の作である。彼は四十四歳の時に江州司馬に左遷され、この詩が作られた時*も*いまだこの職にあった。⁽⁴⁾白居易は左遷の悲哀を紛らわすために、江州での生活を楽しもうとした。

その楽しみの一つが、景勝の地廬山に遊ぶことであつた。そしてついに、彼は廬山に草堂を建てることにする。この詩は、その草堂の落成の後に作られたものである。

まず、この連作五首を引用する。

五架三間新草堂 五架 三間の新草堂

石階桂柱竹編牆 石階 桂柱 竹 牆を編む

南簷納日冬天暖 南簷 日を納れて冬天暖かく

北戸迎風夏月涼 北戸 風を迎へて夏月涼し

灑砌飛泉纒有点 砌に灑そそぎて 飛泉 纒かに点有り

扠窓斜竹不成行 窓を扠ひて 斜竹 行を成さず

来春更葺東廂屋 来春 更に東廂の屋を葺き

紙閣芦簾著孟光 紙閣 芦簾 孟光を著けん

第一首は、草堂の建物の様子を詠んだものである。結びの句の「孟光」は、妻のことである。草堂の東側の部屋が整えられれば、妻とともにこの草堂に住むことができる。そうすれば、草堂は仮住まいではなくなる。草堂の造作が整えられて行くことは、同時に彼の隱遁の生活が完成に近づくことなのである。すなわち、連作の最初で、建築物としての草堂が、白居易の隱遁の志と不可分なものであることを示すのである。

喜入山林初息影 山林に入りて初めて影を息やすむるを喜び

厭趨朝市久劳生 朝市に趨りて久しく生を劳いとするを厭ふ

早年薄有煙霞志 早年 薄いさか煙霞の志有るも

歳晚深諳世俗情 歳晚 深く世俗の情を諳そらんず
已許虎溪雲裏臥 已に虎溪雲裏に臥するを許し
不爭竜尾道前行 竜尾道前に行くを争はず
從茲耳界応清浄 茲より耳界 応に清浄なるべく
免見啾啾毀譽声 啾啾たる毀譽きの声を免かる

第二首は、仕と隠とを対比させ、隠遁生活に傾く心情を詠む。

長松樹下小谿頭 長松樹下 小谿の頭ほとり
斑鹿胎巾白布裘 斑鹿胎の巾 白布の裘
葉圃茶園為産業 葉圃 茶園 産業と為し
野麋林鶴是交遊 野麋 林鶴 是れ交遊
雲生澗戸衣裳潤 雲 澗戸に生じて衣裳潤ひ
嵐隱山厨火燭幽 嵐 山厨を隠して火燭幽かなり
最愛一泉新引得 最も愛す 一泉 新たに引き得て
清冷屈曲遶階流 清冷 屈曲して階を遶りて流るるを

第二首で述べた隠遁の志に従い、白居易は草堂へ向かう。第三首は、冒頭で草堂へ入る道のさまを述べ、さらに草堂の敷地の様子を詠む。

日高睡足猶慵起 日高くして睡り足れども猶起くるに慵し

小閣重衾不怕寒 小閣衾を重ねて寒きを怕れず
 遺愛寺鐘欵枕聽 遺愛寺の鐘は枕を欵てて聴き
 香鑪峯雪撥簾看 香鑪峯の雪は簾を撥げて看る
 匡廬便是逃名地 匡廬は便ち是れ名を逃るるの地
 司馬仍為送老官 司馬は仍ほ老を送るの官為り
 心泰身寧是歸処 心泰く身寧きは是れ歸する処
 故郷可独在長安 故郷独り長安に在るべけんや

第三首が草堂の外部を描いたのに対し、第四首では草堂内での生活の様子を詠む。そしてさらに、そこでの生活の感想を述べている。

官途自此心長別 官途 此れより心から長く別れ
 世事従今口不言 世事 今より口に言はず
 豈止形骸同土木 豈に止形骸を土木と同じうするのみならんや
 兼将寿夭任乾坤 兼ねて寿夭を将って乾坤に任せんとす
 胸中壯氣猶須遣 胸中の壯氣は猶須らく遣るべく
 身外浮榮何足論 身外の浮榮は何ぞ論ずるに足らん
 還有一条遺恨事 還って有り 一条 遺恨の事
 高家門館未酬恩 高家の門館 未だ恩に酬いず

第三首の後半で叙景から叙情に転じたのを受けて、第五首では再び隱逸の志が述べられる。ここでは、「胸中壯氣猶須遣る」とある。

遣」などに示されるように、第二首に比べて心情がより内面化されている。

この連作は、以上のように緊密な構成をもって配置されている。ことに第四首は、叙景と叙情の両方を含み、この連作の中で重要な位置にある。

二、「欵枕」の解釈をめぐる諸説

次に、「欵(敲)枕」の語の解釈について、諸家の説をまとめておく。これについての最も早い論考は、工藤篁氏の『敲枕』について(『中国語学』七二号、中国語学研究会、一九五八)である。工藤氏は、『佩文韻府』にもとづき主に唐詩に用いられた「敲」の用例を検討し、さらに『説文』によって「敲」の本義を考究して、次のように結論する。

枕を高くして寝るといふ行為は、頭部の鬱血を散じ、安眠をもたらず。つまり敲枕することも精神の安定感を促すことにほかならない。敲枕とは枕を傾側して熱した頭部を支えることである。《説文》にいう「持」或は「持去」を支えると解釈するとき、このことは自から明かとなる。ただし11月例会の後での討論では、枕の位置を両様に理解することになった。一は倉石教授の御意見である。枕を半回転することによって、つまり角枕であればその一稜を立てることによって高枕の状態を求めらるのである。一は卑見であるが、枕を直立してのちそれを傾斜し、高枕を求めらるのである。さらに上半身を起し、小脇に挟むことによって、半身を支える形にまで進展する可能性がある。いずれも枕そのものは「持去」し、傾側して不安定となり、その状態を久しく続けることは困難となる。……ただ人の頭部、或は上半身がこれに恁れることによって、バランスを保つのである。

戸川芳郎氏は、『枕をそばたつ』解(『国文学』——解釈と教材の研究』第八卷第五号、学燈社、一九六三)において、工藤氏の解釈に賛同を示し、さらに『源氏物語』中の「枕をそばたつ」の語もまた同様に解釈できることを論証している。また戸川氏は、『敲枕について』補論(『汲古』第十四号、汲古書院、一九八八)において、「敲」の字義について、『説文』以

下の字書その他の資料に基づいて考証し、次のように結論する。

ここにおいて、「敲枕」の語句の意味は、確定的となったのである。すなわち、角枕を不安定な姿勢に立てて傾側させること、これに外ならない。

この工藤氏・戸川氏の説に対して、岩城秀夫氏は「遺愛寺の鐘は枕を敲てて聴く」（『国語教育研究』第八号、広島大学教育学部光葉会、一九六三）において別の解釈を提示している。岩城氏は主に詞の中から「敲枕」の用例を広く求め、それらにもとづいて、次のように結論する。

眠れぬままに輾転反側するとき、おのずから生ずる枕の傾斜をいうことばとして、敲枕の二字は使用されていると思われる。

ただし、白居易詩の場合には、眠れぬ夜のさまを詠んだものではないので、次のように解釈すべきであるとする。

白居易のこの詩の場合、前述のように、おそくまで熟睡した朝の、起きるのも面倒で寝そべっている作者の様子を想像するのが、正しいであろう。姿勢は横向き、意識の上では枕はなにがしか傾斜していたはずである。

つまり岩城氏は、「敲枕」が高枕であることを否定するのである。

さらに別の解釈を、埋田重夫氏は『遺愛寺鐘敲枕聴』考——白居易の詩語が意味するもの——（『中国文学研究』第十四期、早稲田大学中国文学会、一九八八）に発表している。埋田氏は、『全唐詩』の中の「敲枕」の用例を綿密に分析して、次の説を論証している。

白居易の使う三例に限らず、唐詩——狭義の詩歌——で詠われる全ての「欵枕」は、その傾斜する対象が実は枕ではなく人であるとする立場である。結論的に言えば、「欵枕」なる詩語は、人間が枕の上に側臥（横臥）している状態を示すに過ぎない、という仮説である。この解釈がもし正しいとするならば、「欵枕」の訓読は「枕を欵そばだてる」ではなく「枕そばだに欵そばだてる」でなければならない。

この埋田氏の説に対して松浦友久氏は「遺愛寺鐘欵枕聽——詩語とその受容」〔月刊しにか〕一九九二年八月号、大修館書店）において支持を表明し、さらに、

「遺愛寺鐘欵枕聽」は、明らかに「枕そばだに欵そばだはりて聴く」と訓よまれるべきものだった。

と、訓読を改める。

以上のように、「欵（敲）枕」の解釈については、①工藤氏・戸川氏の説、②岩城氏の説、③埋田氏・松浦氏の説、の三説が存在する。これらはいずれも、字書や詩詞の用例など多くの資料を綿密に調査分析して得られたものであり、その考証の優劣をにわかには断ずることはできない。そこで筆者は、白居易の「香鑪峯下」詩第四首の中の「欵枕」の語の解釈について、先人諸家とは別の手法によって検討しようと考えた。

その手法とは、まず「香鑪峯下」連作五首の詩、その中でも第四首の構成を分析する。そして、その結果得られた作品の性格に基づいて「欵枕」の解釈を決定するのである。結論から先に言えば、筆者は工藤氏・戸川氏の解釈「角枕を不安定な姿勢に立てて傾側させること」を支持するものである。

岩城氏は、工藤氏の説に異論を示すに当たり、その動機について次のように述べる。

しかし、しかく不安定な状態では安眠をうることができないのではないか。また、たといその姿勢で眠りにつく

ことができたとしても、「その状態を久しく続けることが困難な」ほど、「不安定な状態」では、すぐに姿勢がくずれてしまうのではなからうか。

埋田氏もまた、岩城氏と同様の点に着目している。そしてさらに、自説について次のように述べる。

枕自体が傾斜するという不自然さは、この仮説に立つ限り、ほとんど全く成立しないことになる。

埋田氏も、安眠のための自然な姿勢として「欹枕」を解釈するために、自説を展開しているのである。

しかし、他の詩詞の中の「欹（敲）枕」はしばらく置くとして、白居易の「香鑪峯下」詩第四首の中の「欹枕」は、日常的にありふれた寝姿を示すものでないほうが、この作品に用いられるにふさわしい詩語となる、と、筆者は考える。なぜならば、「香鑪峯下」詩は、白居易の日常の体験や感情をありのままに詠んだものではなく、それを修辭的に再構成したものである。以下に、これを詳述したい。

三、「香鑪峯下」詩第四首の性格

白居易は、「香鑪峯下」詩以外にも、廬山の草堂を主題にした作品をいくつか残している。それらの中で最も文飾を施していないのは、散文の「草堂記」（『白氏文集』巻二十六）であろう。本節では、主に「草堂記」を用い、またその他の白居易の作品を援用しつつ、「香鑪峯下」詩第四首の性格について考察する。

先に示したように、「香鑪峯下」詩第四首は、その前半が第三首から続く叙景、後半が第五首へと続く叙情と、内容からみて前後に分かれている。「欹枕」を含む頷聯は、叙景の部分の終わりに当たる。ここではまず、解釈の上で大きな問題のない後半から先に検討する。

「匡廬便是逃名地」は、この句の前までの叙景部分を承けて、草堂を建てた廬山が隠遁生活にふさわしい場所であると

するものである。それに加え、「司馬仍為送老官」で、江州司馬の閑職も、隱逸の志を持つ自分にはふさわしい官であると述べる。この対句を踏まえて、「心泰身寧是歸処」、身も心も安らぐ所が、落ち着くべき場所だ、という心情が述べられる。この句で「歸する処」とは、「匡廬」「司馬」の両方を指しているが、重点が置かれるのは前者であろう。なぜならば、「香鑪峯下」連作五首の中では、江州司馬の職について具体的な言及はないのに対して、廬山とその地の草堂については、第一首、第二首、そして第四首の前半でその魅力を様々な角度から述べているからである。よって、「心泰身寧」とは、草堂で寝起きすることによって得られた心身の安らぎを言うものである。そして結びの「故郷可独在長安」で、廬山の地もまた故郷と呼ぶにふさわしい、と結論する。この結びの句に用いられた「故郷」の語は、詩人が長安での生活棄てて廬山で暮らそうとする意向を表明した言葉として、効果的である。

この「故郷」の語は、「草堂記」の中でも、廬山の地の印象を表現する言葉として用いられている。次に「草堂記」の冒頭を引用する。

匡廬奇秀甲天下山。山北峯曰香鑪、峯北寺曰遺愛寺。介峯寺間、其境勝絶、又甲廬山。元和十一年秋、大原人白樂天見而愛之、若遠行客過故郷、恋恋不能去。因面峯腋寺、作為草堂。

匡廬の奇秀は天下の山に甲たり。山北の峯を香鑪と曰ひ、峯北の寺を遺愛寺と曰ふ。峯寺を介するの間、其境勝絶にして、又廬山に甲たり。元和十一年秋、大原の人白樂天、見て之を愛すること、遠行の客の故郷を過りて、恋恋として去る能はざるがごとし。因りて峯に面し寺に腋して、作りて草堂を為す。

ここでは、白居易が廬山の景勝を見て心ひかれた様子を、旅人が故郷を訪れて立ち去り難いさまにたとえる。そして、ついにはこの地に草堂を建てて至るのである。

また「草堂記」には、「香鑪峯下」詩第四首の「心泰身寧」のもとになったと思われる表現が見える。これは、草堂が完成してそこに泊まった際の心情を記した部分にある。次にこれを引用する。

俄而物誘氣隨、外適内和、一宿体寧、再宿心恬、三宿後頽然嗒然、不知其然而然。
 俄かにして物誘ひて氣隨ひ、外適ひて内和し、一宿して体寧く、再宿して心恬く、三宿の後、頽然嗒然として、其の然して然ることを知らず。

「香鑪峯下」詩第四首は、草堂に寢泊まりして、身も心も安らぎ、その結果廬山を故郷と感ずるようになった、という順序で展開している。これに対して「草堂記」では、まず廬山の地を故郷であるかのように感じたことを契機として、この場所に住めるように草堂を作り、寢泊まりすることによって、身も心も安らぐ、という順序で記述している。この両者には、廬山が故郷に等しいという思いが、草堂を立てた結果であるか原因であるかの違いがある。

この両者のうち、白居易の意識の流れを忠実になぞったのは、「草堂記」の方である。それを明らかにするため、白居易が草堂を建てる前年に作った「四十五」詩（『白氏文集』卷十六）を引用する。

行年四十五 行年 四十五

両鬢半蒼蒼 両鬢 半ば蒼蒼たり

清瘦詩成癖 清瘦たる詩は癖を成し

麤豪酒放狂 麤豪たる酒は狂を放ほしにす

老来尤委命 老来 尤も命に委ね

安処即為郷 安んずる処 即ち郷と為す

或擬廬山下 或ひは擬す 廬山の下

来春結草堂 来春 草堂を結ばん

草堂を建てる以前から、白居易が廬山の地を故郷のように思っていたことは、この詩から明らかである。その思いに駆

られて、白居易はこの地に草堂を作ったのである。

つまり、「香鑪峯下」詩第四首の「心泰身寧是帰処、故郷可独在長安」は、詩人の意識の流れをそのままに記述したも
のではなく、それを構成し直したものである。廬山を訪れたことのない読者に対して、この地が故郷に等しいとい
う思いを伝えるためには、まず先にこの地の魅力を述べたほうがより効果的である。そのため、「故郷」の語はこの第四
首の結びに置かれたのである。

この「香鑪峯下」詩第四首では、心情の描写において、このように事実の再構成がなされている。それとともに、叙景
においても、実際の情景とは異なる描写がなされた箇所がある。それは、第二句の「小閣重衾不怕寒」の「小閣」であ
る。「閣」は、『玉篇』によれば「楼」つまり、たかどの、二階屋である。しかし、「草堂記」の中で草堂の間取りを記し
た次の箇所を見ると、この建物は明らかに平屋である。

明年春、草堂成。三間両柱、二室四牖、広袤豊殺、一称心力。

明年春、草堂成る。三間両柱、二室四牖、広袤豊殺、一に心力に称かなふ。

おそらく白居易は、「不怕寒」と言うにふさわしいように、草堂を実際よりも立派な建物として描いたのだろう。

このように、実際の情景を改変して、詩中の情景にふさわしくしている例は、「香鑪峯下」詩五首の他の詩にも見られ
る。その一つが、第一首の二句目「石階桂柱竹編牆」の「桂柱」である。実際の草堂の柱は、次に示す「草堂記」の記
述にあるように、白木でできていた。

木斲而已、不加丹。

木は斲けずりしのみ、丹を加へず。

単なる白木であっても、心地よい香りを発する。これを白居易は美化して、香木の桂でできた柱、といったのである。

以上のように、「香鑪峯下」詩は、白居易の日常をありのままに描いた作品ではない。これは、叙情と叙景の両面にわたって、詩的効果を高めるために言葉を選んで構成されているのである。この事実を踏まえて、次節では「遺愛寺鐘欵枕聴、香鑪峯雪撥簾看」の対句を白居易がどのように構想したのかを推定し、さらに「欵枕」の解釈を検討する。

四、「遺愛寺鐘欵枕聴、香鑪峯雪撥簾看」の対句中の「欵枕」の解釈

「香鑪峯下」詩第四首では、叙情部分で最も重要な語が「故郷」であった。それに対して、叙景部分では、「遺愛寺」「香鑪峯」の語が重要である。先に引用した「草堂記」の冒頭を、再び引用する。

匡廬奇秀甲天下山。山北峯曰香鑪、峯北寺曰遺愛寺。介峯寺間、其境勝絶、又甲廬山。元和十一年秋、大原人白樂天見而愛之、若遠行客過故郷、恋恋不能去、因峯腋寺、作為草堂。

廬山の中でも、白居易が特に心引かれたのは、香鑪峯と遺愛寺によって画される場所であった。当然、草堂はここに作られる。そこで、草堂から眺められる景観を描写する対句として、「香鑪峯」「遺愛寺」の語を用いた対句が着想されたのであろう。

その香鑪峯が最も美しい姿を見せるのは、冬の雪景色である。「草堂記」の中ほどの廬山の風景をより詳細に記した箇所を次に引用する。

其四傍耳目杖履可及者、春有錦繡谷花、夏有石門澗雲、秋有虎谿月、冬有鑪峯雪、陰晴頭晦、昏旦含吐、千變万状、不可殫紀、觀縷而言、故云甲廬山者。

其の四傍、耳目杖履して及ぶべき者は、春に錦繡谷の花有り、夏に石門澗の雲有り、秋に虎谿の月有り、冬に鑪峯

の雪有り、陰晴頭晦、昏旦含吐、千變万狀、ことごと殫く紀すべからず、覩縷して言ふ、故に廬山に甲たる者と云う。

ここでは、春夏秋冬それぞれの季節に見るべき景勝を記しているが、その中に「鑪峯の雪」の語がある。ここから「香鑪峯の雪」という表現が導き出されたのである。

草堂の屋外の情景を描いた「香鑪峯下」詩第三首には、「雲生澗戸衣裳潤」の句がある。これは、右の引用の「夏有石門澗雲」に基づくものである。第三首は夏の情景なのである。それに対して第四首は、「香鑪峯の雪」の語を用いたために、冬の情景を詠んだ詩となった。あるいは、「遺愛寺鐘欵枕聽、香鑪峯雪撥簾看」の対が先に作られ、それに合わせて、冬の草堂の中での生活を描写する「小閣重衾不怕寒」の句が作られたのではなからうか。

次に、「遺愛寺・香鑪峯」対句の中の「鐘を聴く」と「雪を見る」の対応と関連する一文を、「草堂記」の中から引用する。

樂天既來為主、仰觀山、俯聽泉、傍晚竹樹雲石、自辰及酉、応接不暇。

樂天既に來たりて主為り、仰ぎて山を觀、俯して泉を聴き、傍に竹樹雲石を睨、辰より酉に及ぶも、応接に暇あらず。

ここでは、草堂での楽しみとして、山を見ることと、泉の音を聞くことが挙げられている。この「仰觀山、俯聽泉」は、視覚と聴覚との対比である。「香鑪峯・遺愛寺」の対句においても、やはり「聽」「看」の語によって聴覚・視覚の対比がなされている。「仰觀山」と「香鑪峯の雪を見る」との類似は明らかであろう。一方、聴覚に訴えるものは、「泉」から「鐘」へと変更されている。

この変更の理由は、次のように推測される。遺愛寺にも泉があり、その水音を白居易が好んでいたことは、次に引用する「遺愛寺」詩（『白氏文集』卷十六）からわかる。

弄石臨谿坐 石を弄び 谿に臨みて坐し
 尋花遶寺行 花を尋ね 寺を遶りて行く
 時時間鳥語 時時 鳥語を聞き
 処処是泉声 処処 是れ泉声

しかし、泉の水音は、冬よりも夏の風物にふさわしいであろう。先に述べたように「香鑪峯下」詩第三首は、夏の情景を詠んだ詩であるが、その尾聯には、泉について次の描写がある。

最愛一泉新引得 最も愛す 一泉の新たに引き得て
 清冷屈曲遶階流 清冷 屈曲して階を遶りて流るるを

「泉」の語を第三首と第四首に重ねて使用するのは適当でない。よって、冬の情景を詠む第四首には別の語を用いなければならぬ。そこで、寺院にちなんで「鐘」の語が選ばれたのであろう。

以上のようにして、「遺愛寺の鐘を聴く」「香鑪峯の雪を見る」の対応は構想されたのであろう。この対は、詩人の日常の一場面を描写したのではない。「草堂記」に文字通り散文的に描かれた草堂からの景観とそれを愛でる詩人の姿を、二句に凝縮し、いわば結晶化させた対なのである。

この用意周到に構成された情景の中での詩人の主体的な動作が、「欹枕」「撥簾」である。これもまた、とある朝に白居易が行った動作を写したのではない、と考えるのが自然であろう。「撥簾」については、太田次男氏の「白詩受容考——『香鑪峯雪撥簾看』について——」（『藝文研究』No.33、慶応大学藝文学会、一九七四）に詳細な論考がある。太田氏は、「撥簾看」の解釈について、次のように結論する。

「撥簾看」とは、ごく普通にみられる、簾を高々と巻き上げて、山を見る、ということ表現したものではなく、そこには、心理的屈折があり、鐘の音に誘発され、山を見るべく、纒かに簾を上げる程度の動作を表現したものである。

そしてさらに、太田氏は「撥簾」を白居易の造語であるとする。つまり、白居易は、すだれの向こうの山雪を見る動作として一般的ではない「撥簾」の語を用いているのである。太田氏が述べるように、この動作によって白居易は特別な心情を表現した。それとともに、白居易は、選び抜かれた情景に対しては、それを感受する側にも特別な心構えが必要であることを示したのではないだろうか。その心構えが、「撥簾」という特殊な動作によって表現されたのである。

この「撥簾」と対応する語として、白居易は「欹枕」を選んだ。こちらは、白居易の造語ではない。埋田重夫氏の前掲論文の調査によれば、「欹(欹)枕」を詩語として最も早く用いたのは、大暦十才子の李端と司空曙で、両者ともに二首の詩にこの語を用いている。そしてこの語は、白居易、元稹、劉禹錫らに継承され、晩唐期に至ると、より広くより多くの詩人によって使用された、とされる。よって、「欹(欹)枕」は、白居易と同世代の人々にとって、詩語としては一般的ではなかったのである。この新奇な詩語を、人間が枕の上に横たわっている、といったごく普通の就寝の姿勢を表すものと白居易が解釈していたならば、「撥簾」という独自の詩語に対応するものとして選び取ったであろうか。「欹枕」もまた「撥簾」と同じく、特殊な動作として解釈した方が、詩の構成上、自然であろう。

結 び

本稿では、白居易の「香鑪峯下」詩に用いられた「欹枕」の語の解釈のために、連作五首全体、その中でも「欹枕」の語を含む第四首、そして「遺愛寺鐘欹枕聽、香鑪峯雪撥簾看」の対句について、その性格と構成について検討した。その結果、「香鑪峯下」詩は、白居易の日常をありのままに詠んだものではなく、「草堂記」などの記述を再構成し詩的に

修飾したものであることが明らかになった。特に「遺愛寺・香鑪峯」の対句は、連作の情景描写の頂点を形成するものとして、きわめて用意周到に構成されていることがわかった。そこで、「欵枕」は「撥簾」と同じく、平凡な動作の表現ではないと推定できる。つまり、現在提示されている諸家の解釈のうち、工藤篁氏と戸川芳郎氏が提唱する、枕を不定な姿勢に立てて傾側させる、という説が最もふさわしいのである。

なお、他の詩詞の「欵(欵)枕」については、それぞれの作品の性格と内容に即して解釈しなければならないだろう。ここでは、先行用例である李端・司空曙の詩の四例、および白居易の他の詩の二例は、いずれも、「香鑪峯下」詩の用例と同じく、目覚めた状態で横たわり、「欵(欵)枕」していることを指摘するに止める。本来、「欵(欵)枕」は、入眠するためではなく、目覚めた状態で安楽に横たわるための姿勢であったのだろう。

注

(1) 白居易の作品の引用の底本は、「四部叢刊」本とし、他のテキストに従って適宜文字を改める。詩題については、底本では五首のうち第一首を「香鑪峯下……」とし、残り四首を「重題」としている。

(2) この詩の解釈の異同については、松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』(大修館書店、一九八七)に詳しい。

(3) 「欵」字は「欵」字の譌字であるが、本稿では底本に従い、「香鑪峯下」詩の中の用例を指す場合には「欵」字を用いる。

(4) 白居易の伝記や作品の編年については、花房英樹『白居易研究』(世界思想社、一九七二)を参考にした。

(5) 「孟光」は、『後漢書』逸民列伝、梁鴻、に見える。夫の梁鴻とともに霸陵山中に隠棲した。

(6) 白居易の本籍は太原であり、また生地は鄭州新鄭県である。つまり長安は現代日本語でいうところの故郷ではない。この「故郷」は、ふるくからなじんでいる場所、の意味である。

(7) 太田氏は、同論文の注のなかで、「香鑪峯下」詩の構成について、次のように述べる。

白氏は草堂創建以前にも屢々香鑪峯周辺に行遊しているので、この辺一帯は熟知していた。恐らくは、その時の経験をふまえて(「草堂記」は……筆者注)書かれたものであろう。

(8) こういう見方からすれば、第四首の第三句「遺愛寺鐘欹枕聽」の鐘の音についても、第一句「日高睡足……」と時間上やや矛盾する如く思われ、この詩作時に於ける直接的経験というよりも、廬山周辺の、従来の全経験の中より、詩的必要から、つまり、「撥簾」して香鑪峯の雪をみる動作への契機として、「鐘」の句が必要であったものと思われる。

埋田氏が示す「欹枕」の初出用例は、以下の通りである。

欹枕鴻雁高、閉関花葉盛。(李端「贈薛戴」)

欹枕聞鴻雁、迴燈見竹林。(李端「宿山寺思歸」)

聞蟬昼眠後、欹枕對蓬藁。(司空曙「間園書事招暢當」)

長簟貪欹枕、輕巾懶挂頭。(司空曙「苦熱」)

また、白居易の二例は、以下の通りである。

欹枕不視事、両日門掩関。(「病仮中南亭閑望」)

捲簾睡初覺、欹枕看未足。(「東樓竹」)